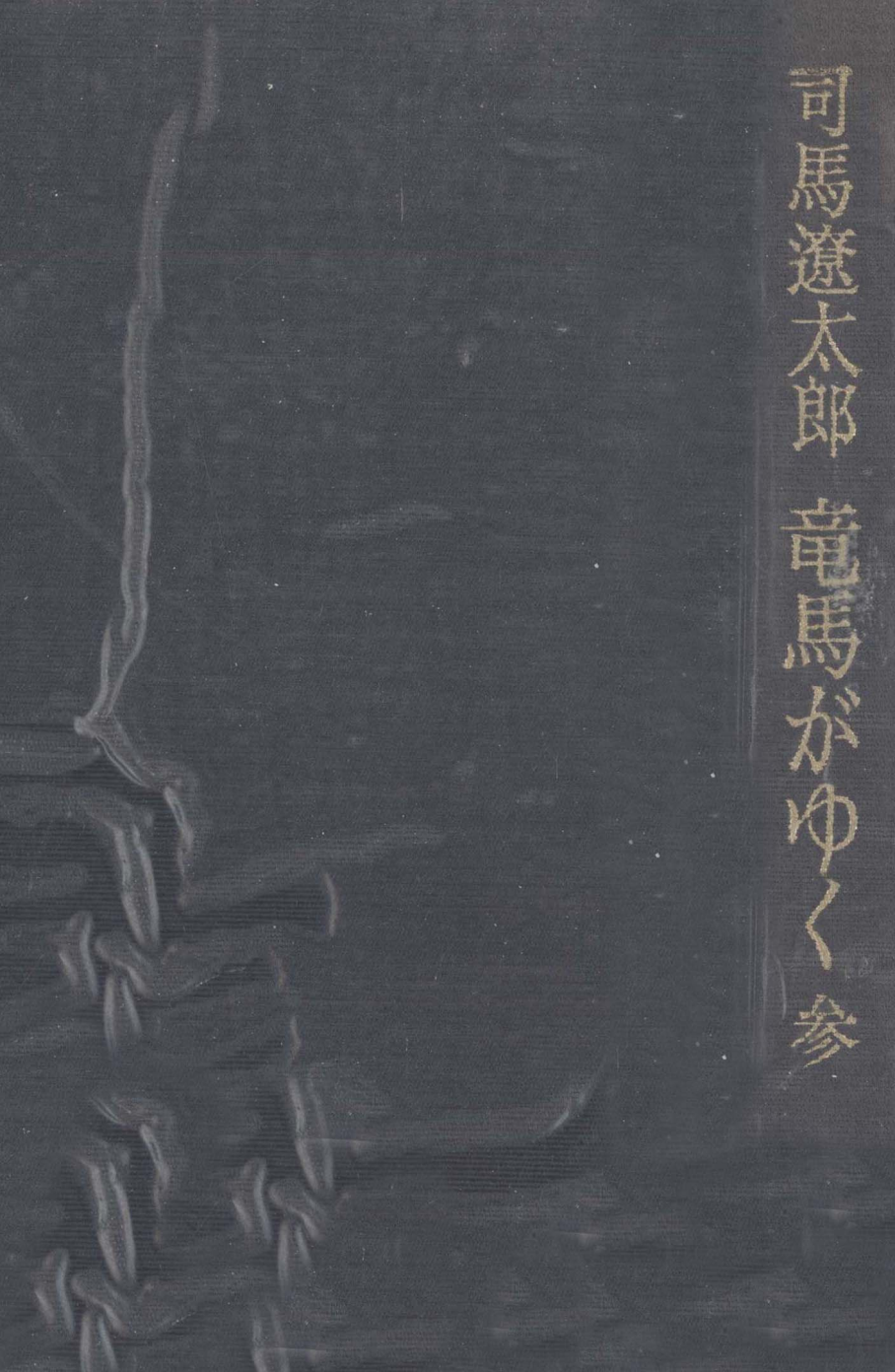


司馬遼太郎 竜馬がゆく 参



司馬遼太郎

竜馬がゆく

全八卷之参

龍馬

文藝春秋

糸

竜馬がゆく 参 (愛蔵版)

昭和五十六年十二月二十五日 第一刷

定価 二千三百円

著 者 司馬遼太郎

発行者 杉村友一

発行所 株式会社文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三一二三
電話 東京 二六五一一二一一

印刷 大日本印刷

製本 大日製本

製函 トーシキ

万一、落丁乱丁の場合はお取り替え致します

目次

追跡者 7

寺田屋騒動 44

流転 77

生麦事件 133

勝海舟 153

伯樂 203

京の春

322

海へ

275

嵐の前

241

裝幀
題字
栗屋
中田
充功

竜馬がゆく
参

追 跡 者

高知城下から南へ一里余。

神田、という山村がある。

この山村へ行くのに、ほとんど道らしい道がないために、城下の人は、

——神田の衆の足には道は要らん。野ねずみのように出来ちよるキニ。
とわるくちをいった。

その村に、井ノ口村うまれの岩崎弥太郎が居を構えている。構えている、といった家屋敷ではなく、小屋のようなものであった。

この年の二月、すでに二十九歳になっている弥太郎は、十七歳の年わかい嫁をもらった。

お喜勢きせいといい、眼の涼しげに切れた、利発りぱつそうな女性である。

——鬼瓦きわみたような弥太郎でも、嫁の来手きてがあつたわい。

と同僚が蔭口をいったが、羨望もあつたのだらう。鬼瓦には惜しいほどのいい嫁であつた。お

喜勢は、改田村^{かいだ}という在所の郷土高芝玄馬の娘で、のちの三菱会社の三代目社長久弥を生んだひとである。

この年五月。

東洋の暗殺事件から五十日経った。

月末は、雨がつづいた。ある宵、日が暮れてからしきりと弥太郎の家の雨戸をほとほとたたく者がある。

「あの、どなた様か。——」

と、新妻のお喜勢が立とうとした。

「わしは他行^{たぎょう}していると申せ。夜ふけて他人の家の戸をたたくようなやつは、ろくな用事をもつて来くさらんわい」

せまいふた間きりの家だ。

弥太郎は、台所にかくれた。つまらぬ用を押しつけられたくない。そういう点、お喜勢がびつくりするほど、味も素っ気もない男であった。

客は、二人である。

一人は、ほんのこのあいだまで藩の大目付（大監察ともいう）として時めいていた故東洋門下の大崎巻蔵。

もう一人は、身分はひくい。弥太郎と同僚の下横目の井上佐一郎である。

（妙じゃな）

井上はともかくとして、大崎卷蔵のような上士が、弥太郎の家をわざわざ訪ねるなどということとは、まずありえない。

（はて、大崎様がわざわざ来られるとは、損な用事か、得な用事か）

台所でひそみながら、判断に弱った。損得どっちにしても、これは大仕事にちがいない。

「えっ、弥太郎は不在ですか」

と、ふすまのむこうから、大崎卷蔵の若々しい声がきこえた。失望の色がある。

「それではお内儀、帰るまで待ちます」

と、大崎はいった。

弥太郎はじつのところ、東洋暗殺の前後、勤王党の動静をさぐるためにずいぶん働いたものだが、その後ほどなく病氣と言いたててこの神田村にひっこみ、ずっと役所に出ていない。

利口な男なのだ。新旧両派の対立が将来もっと激化することを見通している。

そういう対立のあいだにはさまれて、人に無用の恨みを買ったり、あるいは大怪我をしたりするのは、ばかばかしいと思ったのだ。

「御内儀、今夜は泊まりこんででも、御亭主の帰りを待ちたいと思いますから、ご迷惑ながら、そのおつもりで」

（ちっ、泊りこみのつもりで居やがるのか）

台所のすみで、岩崎弥太郎は、弱りきってしまった。これでは、出るに、出られない。

弥太郎は、板敷の上に寝ころがった。もうこうなれば、蚊に食われようがどうしようが、ここで寝こんでしまうことに度胸をきめた。

（大崎の若僧め、新内閣から大目付を免ぜられなくせに、まだ上司風を吹かせくさる）

弥太郎は、こんどの東洋暗殺を機会に、役目を辞してもとの地下浪人にもどるつもりでいた。

（おれほどの男が、可哀そうに、三年も下横目の役目をつとめてきたんじゃ、このさき百年つとめたところで、地下浪人あがりの素姓では上士に取りたてられるわけでもない。くだらぬ）

恩人の東洋も死んだ。

もう、たれに遠慮することもない。さっさと下横目の卑役をやめて、自分の才幹を生かせられるような身の振りがたを考えようとおもっている。

——弥太郎ほど、おかしなやつはない。

と、武市半平太がかつて門下生に人物論議をしたことがある。もってうまれた氣力胆力が超人的で、そのうえ文字にも明るいくせに、この男だけは、勤王でも佐幕でもないのである。主義めかしいことは一切口にしなかった。興味が無いのだろう。

弥太郎に主義があるとすれば、徹頭徹尾、自分主義である。信奉すべきは、天皇でも將軍でもなく、自分であつた。べつに我利々々の亡者というのではなく、弥太郎自身、この広い世の中で、岩崎弥太郎ほどすぐれた人間はいないと思つている。心中、信奉するに足ると思つているのだ。

「おや」

と、大崎卷蔵が首をひねった。

台所で、いびきがきこえてくるのである。

「御内儀、あのいびきは？」

「は、はら」

お喜勢はあわてた。

「ねずみでございましょうか」

「ははあ、神田村のねずみは、いびきまでかくのでござるか」

いびきはだんだん大きくなり、ついにはもう、お喜勢もかくしきれなくなつて、

「あの、ちよつと」

と立ちあがつた。

「あるいは主人が勝手口から帰つてきて、そのまま眠りこんだのかもしれない。見て参りまする」

岩崎弥太郎は、仕方なく、客の前へ出てきた。

「やあ、弥太郎」

「これはこれは大崎様。すこし、出先で振る舞酒に酔い、前後不覚のまま戻りまして」

「左様か」

客は、あいさつもそこそこに、

「さつそくながら、折り入つての頼みがある。吉田東洋様御非業の一件、いまだに下手人がみつからぬことは、そこもともよく存じておろう。新藩庁は、下手人を存じておりながら、知らぬ顔

で探そうともせぬ。――そこで」

と、大崎巻蔵は、扇子で弥太郎を指し、

「そこもとに、頼みたい。いやさ、私はすでに大目付の職にはないが」
じつと、弥太郎の顔をみた。

「弥太郎、つつしませい」

と、大崎巻蔵は軽く注意の言葉をかけてから、さも大事そうに一通の手紙をひろげた。

「ほう」

弥太郎はのぞきこんだ。

なんと、江戸鮫洲の藩邸で隠居する老公容堂の御直筆である。

この当時の幕府の法として、大名の隠居というものは、藩政に対する発言権がない。だからこそこんどの国もとの暴力的な政変に対しても、表面、だまっているしか手がなかった。

が、裏に打つ手はある。

容堂は、江戸から密使をさしくだしたのである。

藩庁に対してではなく、東洋派の上士たちに対してであった。

「天下諸方に人を派し、草の根をわけても東洋暗殺の下手人をさがせ」

と、容堂は手紙で命じている。そのための捜査費も、江戸から送られてきた。

「大崎様。ちよつとうかがいまするが、下手人はたれとおぼしめす」

と、弥太郎は、さぐりを入れた。

「黒幕は武市よ」

と、大崎はいった。城下では、公然の秘密である。

「このことは、老公もよくご存じじゃ。しかしながら、いかに老公でも、下手人をさがし出して動かぬ証拠をおさえねば、武市を成敗するわけには参らない」

「それで、下手人の目星は？」

「その当夜、およびその前に脱藩した四人。つまり、那須信吾、大石圀蔵、安岡嘉助、それに本町筋一丁目の坂本のせがれ」

「ははあ、竜馬でござりまするな」

「左様」

「お言葉でござりますが、大崎様は、あの坂本をご存じでござりまするか」

「知らん」

なんの、郷土づれを知るはずがあるか、という顔つきである。

「それなら大崎様、お疑いもご無理はござりませぬが、あの男、チトただびとではありませぬな。人を殺して一時の政權をにぎろうというような出来の小さな男ではござりませぬ」

「弥太郎、言葉をつつしむがよいぞ」

と、横合いから同僚の井上佐一郎が、忠義づらでいった。

「このこと、上士のお歴々が何度も密会をかさねられ、御熟慮の上できまったことじゃ。われわ

れの仕事は、かれらを捕えるか、斬るか。それだけでよい。今夜はその御用できている。ぜひ、お受けせい」

(ふん。上士の犬になれ、というのかい)

弥太郎は、ぎょろりと眼をむいたが、

(おもしろい)

ともおもった。上士の連中の犬になるだけならおことわりだが、御隠居の容堂公じきじきのお声がかりとあれば、仕事の性質がちがう。

(やるか)

と思った。容堂公のお耳に自分の名が入れば、ゆくゆく、どういう将来がひらけぬともかぎらぬ。「請けましょう。出立は、いつがよろしゅうございます」

気魄が、毛穴からふつふつと噴き出るような、そんな顔つきで訊いた。

一方、竜馬。

船で、長州三田尻についた。竜馬は、伝馬で棧橋につくなり、天下におどり出るような気持で、陸地に足をつけた。

「おい、沢村ア」

と、惣之丞をよんだ。

「いよいよじゃなあ。これからどこへ行くんじゃ。ええ方角に連れてゆけ」